

言語形式の待遇的価値と談話の「待遇度」

一言語形式に基づく談話分析のための新たな枠組みの提案—

李址遠

【キーワード】 談話・言語形式・スピーチレベル・待遇的価値・待遇度

1. はじめに

スピーチレベル（以下、SL）に関する研究はこれまで膨大な蓄積を見せており、発話文の述語形式を中心に SL シフトの生起条件やその機能・効果などに関して多くの検討がなされてきた。それらの研究は、扱う言語形式や SL の分類などにおいて違いを見せているものの、SL を通して談話という人間の実践行為を捉えようとした点、つまり、談話に参加する人々が何らかの言語形式を選択することで互いの関係性や場面の改まりの程度などを前提的・創出的に指標する（Silverstein, 1976）在り様、すなわち、談話において「なされたこと」（小山, 2008）を明らかにしようとした点では変わらない。しかし、先行研究での分析は、極めて形式的な形でなされる場合が多く、以下で述べるように、談話という実践行為の様相を必ずしも適切な形で捉えてきたとは言い難い。

これを踏まえ、本稿では、言語形式に基づく談話の記述・分析をより妥当なものにするために、従来とは異なる新たな分析の観点を示すことを目的とする。具体的には、SL という捉え方が談話分析するための枠組みとして有する限界を指摘し、言語形式に基づく談話分析により適した新たな観点を示すこと、そして、その観点に基づく分析枠組みの有効性を示すことが本稿の目的である。

2. スピーチレベルという捉え方の限界

これまで行われてきた数多くの SL 研究の中で、そもそも SL とは何かが明確に述べられているものは少数である（cf. 李, 2016）。しかし、明示的な形ではないにせよ、SL の分類およびそれについての記述からは、SL に対する先行研究の共通の認識を確認することができる。それは、SL が、言語形式に内在する丁寧さや待遇度といった「社会指標的意味」（小山, 2008）を客観的に捉え、それを序列化しようとするものであるということである。日本語会話の SL を扱う研究を概観した宮武（2009：311）は、SL という用語について、「①言語形式の丁寧度のみを指す用語で意味が限定されて」おり、「②機能や効果を意味に含まず、言語形式のニュートラルな関係を示している」と述べているが、これは、言語形式の中に丁寧さという性質が内在しており、それを客観的に捉えることができるという考え方を端的に示すものであると言える。

SL という捉え方では、実際の談話において用いられる言語形式（トークン）の社会指標的意味ではなく、言語構造の次元における内包的（象徴的）意味としての丁寧さや待遇度を捉えることが試みられ、様々な言語形式はレベル間の明確な区分を前提とする一元的な軸の上に序列化される。そして、そのようにして作られた言語形式の分類を基に発話がコーディング・分析され、それが年齢、親疎、ポライトネスなどといった側面との関連から考察される。宇佐美（1995）や三牧（1996）などに典型的にみられるように、多くの先行研究において、実際の談話の分析を基に言語形式の SL が判断されるのではなく、予め設けられた半ば恣意的な SL の分類に基づいて談話が分析されている点、そして、SL の分類および発話のコーディングが極めて形式的な形でなされている点からは、言語形式の内包的・抽象的意味としての丁寧さを捉えようとする捉え方を窺うことができる。先行研究における SL の分類とそれに基づく談話の解釈の傾向は、おおよそ以下の図 1. のように示すことができる。

スピーチ レベル	述語形式の例	上下関係	親疎関係	改まり	ポライトネス
高	「学生でございます」「いらっしゃいます」 「いらっしゃいますか」	上	疎	改まり	NP
↑	「学生です」「行きます」「学生ですか」 「行きますか」	↑	↑	↑	↑
	「学生ですけど」「行きますから」				
	「学生ですよ」「行きますね」「行きます？」				
↓	「学生（だ）」「行く」	↓	↓	↓	↓
	「学生だけど」「行くけど」				
低	「学生だよ」「行くよ」	下	親	くだけ	PP
等外	「学生が」「学生も」「学生で」「行って」「行ったら」「行けば」など				

図 1. 先行研究におけるスピーチレベル分類と談話の解釈¹

しかし、先行研究における SL の分類およびそれに基づく談話の分析は必ずしも適切なものだったとは言えない²。従来の SL 研究における最も根本的な問題点は、言語構造の問題としての SL という抽象的な体系を、語用という指標的現象にそのまま適用しようとした点、つまり、言語構造の次元と語用の次元を同一視してしまった点にあると考えられる。

先行研究における SL の体系は、語および句を単位として、同一の言及指示的・文法的機能を不変体としてパラダイムを構成する変異体（たとえば、「学校です」「学校ですよ」「学校」「学校だよ」など）同士の対立によって得られるものであると言える。言語形式の SL は、たとえば「デス>デスヨ>0>ダヨ」といった形で判断され、それぞれが異なるレベルに属するものとして厳密に区別される。しかしそのようなレベル間の厳密な区別は、談話という語用の次元ではそのまま適用することが困難なものである。以下の例（筆者による作例）を検討してみよう。

- (1) A 「明日学校ですか？」
 B 「学校ですよ。」
 A 「あ、そうですか。」
 B 「そうです、学校です。」
- (2) A 「明日一緒に海行かない？」
 B 「海いいですね。でも明日は予定が入ってるんです。残念だなー。」
- (3) (バス停留所で一緒にバスを待っている隣人 (A) に対して)
 B 「今日も暑いですね。」

(1)では、B の発話の述語形式が「ですよ」から「です」に変化しており、従来の解釈（終助詞の有無を考慮している場合）だと、SL のアップ・シフトということになる。しかし、そのような SL シフトが生じたからといって、たとえば A と B の間に距離が生じた、ネガティブ・ポライトネス効果が生じたなどと解釈することはおそらくできないだろう。また、(2)では、B の発話においてデスマス体からダ体への SL シフトが生じているが、A と B の関係によっては、そのシフトによる待遇的効果を認めることが難しい場合があると思われる。たとえば、A と B が親しい先輩と後輩の関係で、B が A に対して用いる主な述語形式（基調文体）がデスマス体であったとしても、「～だな」という述語形式が彼らにとってごく普通のもの（無標）である場合は、それが用いられることによって心理的距離の縮小、ポジティブ・ポライトネスなどといった効果が生じたとは認識され難いからである。最後に(3)について考えてみると、従来の SL の体系に基づいて考えるなら、「デスネ」という述語形式の SL は、「デス>デスネ>0>ダネ」といった体系によって判断されると言える。しかし、そのようにして得られた「デスネ」の待遇的価値を(3)の「ですね」にそのまま適用することはできないと思われる。隣人に対する挨拶では、そもそも「暑いです」「暑い」という述語形式が用いられることはなく、そのため、(3)における「ですね」の待遇的価値は、「デスネ>ダネ」という異なる体系によって付与されると考えられるからである。

このように、抽象的な言語構造の次元において判断された言語形式の SL を談話という語用の次元にそのまま適用することには無理がある。特に言語形式の待遇的価値が厳密に区分された諸レベルから成る体系では、談話における言語形式の待遇的機能や効果を的確に捉えることが困難であると言える。

3. 言語形式の待遇的価値

従来の SL 研究の限界を乗り越えるためには、言語構造と語用、そして、タイプとトークン (cf. Silverstein, 1976; 小山, 2008) の区別を明確に認識する必要がある。議論を分かりやすくするために、デスという述語形式を例にして考えてみよう。デスは、社会指標性を内包的性質（象徴的意味）として付与された言語範疇（レジスター）である (cf. 小山 2008)。つまり、(タイプとしての) デスは、

言語形式それ自体に何らかの待遇的価値を有する。しかし一方でそれは、現実の様々な談話において用いられ（トークン）、様々な指標の意味や機能を担うことができる。たとえば、教師との会話において用いられた学生のデス（トークン）は、教師と学生の間の上下や親疎などを指標し得るし、また、先輩に対して用いられた後輩の発話におけるデス（トークン）は、教師との会話の場合とは違った程度の上下や親疎を指標し得る。つまり、デスのトークンは、それが用いられる場面によって異なる程度の上下や親疎などを指標できるのであり、その指標の意味は、決して固定的だとは言えない。ただしこれは、それがあらゆる上下や親疎などを指標できることを意味するものでももちろんない。デスのトークンは、それがタイプとして有する内包的な待遇的価値に基づいて上下や親疎などを指標できるわけで、その範囲外の場合（たとえば、兄弟同士の会話など）に用いられると、異なる指標的效果（例えば、冗談や皮肉など）を生じさせるのである。

したがって、談話における言語形式の待遇的機能をよりの確に捉えるためには、言語形式の待遇的価値を、従来の SL という捉え方に見られるように、言語形式間で厳密に区分される「点」としてではなく、「幅」として捉える必要があると思われる。つまり、ある言語形式の待遇的価値を、その言語形式が無標として用いられ得る場面の範囲として捉え直すということである。

これを、デゴザイマス体、裸のデスマス体、終助詞（ネ、ヨなど）が付加したデスマス体という三つの文末の述語形式範疇を例にして考えてみたい（以下、それぞれを「ゴザイマス」「デス」「デスヨ」と呼ぶ）。「ゴザイマス」は改まった場面（式典や会議など）で、主に下の話し手から上の聞き手に対して用いられる形式であるが、それに対して「デスヨ」はよりくだけた日常的な会話などに広く用いられるものである。「ゴザイマス」と「デスヨ」が一つの談話における一人の話者によって併用されることはそれほど多くないと考えられ、したがってそれらは異なる程度の待遇的価値を有するとみなすことができる。一方、「デス」は、改まった場面とくだけた場面両方にわたって広く用いられる述語形式であり、「ゴザイマス」とも「デスヨ」とも併用できるものである。したがって「デス」の待遇的価値は、それら二つの述語形式のどちらも重なりを有すると考えることができる。これを幅の形で表すと、以下の図 3. のようなものとなる³。

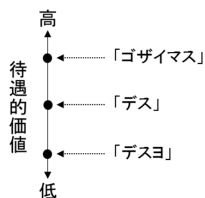


図 2. 点としての捉え方（従来の SL）

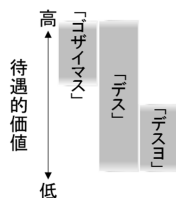


図 3. 幅としての捉え方

言語形式の待遇的価値を高低の一元的な軸の上で捉えることは、一人の言語主体の視点から、現実存在する様々な談話の場面を、高低からなる一つの軸の上に位置付けることを意味する⁴。たとえば、大学生の主体の視点から考えたとき、卒業式でのスピーチや、就職のための面接などといった場面は高の部分に、親しい友人や兄弟との雑談などは低の部分に位置するものとなるだろう。そしてこのように、一つの軸を基準にして、一方では言語形式を、他方では場面を位置付けることによって、両者の間の対応関係（「連動」：蒲谷, 2013）を可視化させることができるようになる。

ただし、言語形式が担い得る指標的意味（＝指標され得る場面の側面）は極めて様々で多元的なものあり、一元的な軸ではそのすべてを十分に反映することができない（cf. 李, 2016）。そこで本稿では、「待遇」という術語が意味する社会指標的意味の側面（すなわち、高低の軸が意味するもの）を、話し手から見た聞き手に対する上下・親疎の関係、そして、場の改まりの程度という三つに限定することとする。これは、話し手の品行や地域性などといった話し手自身への指標の側面や、第三者待遇などの側面を中心的な考察の対象としないことを意味する⁵。このような制限を設けることは、言語形式とその待遇的機能との間の対応関係をできる限り透明にすることで、言語形式に基づく談話の分析をより妥当なものにするためである。しかし、次節でみるように、問題はそう簡単ではない。

4. 言語形式と場面の対応関係

図 1. で示したように、先行研究では、言語形式の SL、上下、親疎、改まりが、すべて正の比例的対応関係にあるものとして捉えられる傾向にあった。このような単純な対応関係が認められてきた原因は、先行研究における SL 分類が、言語形式とその待遇的価値の間のズレが最も少ないと考えられる平叙文を中心に極めて形式的な形でなされ、様々な言語形式の待遇的価値の違いを十分に反映できなかったこと、そして、上下、親疎、改まりのそれぞれの側面と、それらの間の関係に対する十分な考察がなされてこなかったことにありと思われる。

まず、言語形式の方から考えてみたい。これまでいくつかの先行研究では、言語形式とその待遇的価値が常に一致するわけではないことが指摘されてきた（中北, 2000; 森山, 2013 など）。たとえば森山（2013）は、聞き手に対する要求の表現において、事実上ぞんざいでないような配慮のある形が存在するとし、普通体をさらに普通体（ダロウ、～カ、～テクレなど）と配慮普通体（デショウ、～0?、～テなど）に区別できるとしている。もし SL の先行研究がこのような知見を考慮に入れていたなら、図 1. の SL 分類の最下段に、ダロウ、～カ、～テクレなどからなるもう一つのレベルを設けることもできたであろう。それでは、このような言語形式の待遇的価値の捉え方は妥当だと言えるだろうか。

この問題を考える上では、韓国語の SL が参考になる。韓国語には形態上区別

可能な6つの文体がある。それらは一般的に+formal/-formalという性質によって区別された二元的な体系をなすとされているが(cf. 성기철, 2007 など)、一方では、その区別を認めず、一元的にSLを捉えた研究もある(cf. 김민수, 1964 など)。そこで注目すべき点は、一元的体系、二元的体系を問わず、SL体系の最下段に位置する文体(hayla体)が、待遇的に中和化された文体、つまり無標の述語形式であるという点である(성기철, 2007)。hayla体は、最も低い待遇的価値を有すると認識される一方で、そもそも待遇性を有しないという、二つの側面を合わせ持つ述語形式なのである。

そこで再びダロウ、～カ、～テクレなどについて考えてみると、それらが韓国語のhayla体と極めて類似した性質のものであることが分かる。たとえば、ダロウと～カは、新聞や論文などの典型的な書き言葉のジャンルにおける述語形式であり、待遇的に中和化された述語形式として機能するものである。また、～テクレなどの命令形も、道路標識(「止まれ」など)や、緊急性が求められる場面(「逃げろ」など)などに見られるように、命令というムードを実現する無標の形式であると言える。つまりこれらは、待遇的に中和化された無標の述語形式である一方で、相手に直接向けられた場合、他のダ体より低い待遇的機能を有すると認識されるものなのである。そして、このような二重性に着目すると、さらにその他の裸のダ体までを同様の性質を有する述語形式として捉えることができる。たとえば、判定詞ダを伴う裸のダ体は、待遇的に中和化された述語形式でありながら、相手に向けられたときには尊大な感じを与え得る(cf. 黒沢, 2010)のものであり、また、動詞やイ形容詞の裸のダ体などは、相手に向けられた場合に特別低い待遇的機能を果たすとは考え難いものの、相手に向けられた場合とそうでない場合(独り言など)があるように、二つの機能を有する点では変わりがないのである。

このように考えると、裸のダ体のSLを、ネやヨなどの終助詞が付加した他のダ体のSLより上段に位置すると捉えた一部の先行研究の限界が見えてくる。裸のダ体のSLがそのように捉えられたのは、他のダ体とは違い、それがデスマス体の述語形式と併用できるという事実を反映した結果であると考えられる。しかし、だからといって一概に裸のダ体が他のダ体より高い待遇的価値を有すると見なすことはできない。例えば、独り言(「そうだ」「そうか」など)や感情を直接表出する際(「すごい」など)の裸のダ体は、デスマス体基調の会話だけでなく、ダ体基調の会話にも用いられるものであり、そのときの裸のダ体の待遇的機能は、そこに用いられる他のダ体と同等であると考えなければならない。それらは共にダ体基調の会話における無標の述語形式であり、その間のシフトによる待遇的効果は認められないのである。したがって、独話としての裸のダ体の待遇的価値⁶は、図3.に示した「デス」の場合のように、互いに重ならないデスマス体の幅と終助詞が付加したその他のダ体の幅の両方にまたがって広がる幅として理解されなければならない。そしてさらに、裸のダ体の中に、独話の場合とは別に、相

手に直接向けられ、他のダ体より低い待遇的機能を果たすと認識されるものがあることを考えると、裸のダ体の待遇的価値がその他のダ体より高いとはなおさら言えなくなる。

以上に基づき、裸のダ体を、性質を異にする二つの種類、すなわち、独話の場合と相手に直接向けられた場合に区別し、後者を、待遇的価値の軸の最も下の部分に位置するものとして捉えると、言語形式と場面の改まりとの間に新たな対応関係を見出すことができるようになる。繰り返し述べているように、裸のダ体(特にダロウ、～カ、～テクレ、～ダなど)は、相手に直接向けられたとき、他のダ体の述語形式より低い待遇的機能を有するものとして認識され得る。ただしそれは、それらの述語形式が有標として用いられた場合のことである (cf. 黒沢, 2010)。裸のダ体は、法廷における判決の言い渡しや、式典における授賞や任命など、多くの儀礼化された場面において無標の述語形式として用いられるものであり(そのような場面では、反対に、終助詞の付加したダ体などが有標となる)、その待遇的価値に対応する典型的な場面とは、儀礼化の程度の高い改まった場面であると言える。したがって、言語形式の待遇的価値と改まりは、単純な正の比例的対応関係にあるのではなく、言語形式の待遇的価値の両極化と改まりの程度の増加という対応関係にあるものとして捉え直すことができる⁷。

そしてこのような捉え直しにより、言語形式と上下・親疎との間の対応関係も自然と変わってくることとなる。まず、上下について考えてみよう。話し手から見た聞き手の立場が上であればあるほど、改まりの程度が高くなり、また、高い待遇的価値を有する言語形式が用いられるという対応関係は、諸言語文化にわたって広く存在するものであると思われる⁸。しかし、言語形式の待遇的価値の両極化と改まりの程度の増加という上記の対応関係から考えると、言語形式、改まり、上下の間に、単純な比例的関係のみが成立するとみなすことはできない。さらに、例えば、友人同士の同等の関係であっても、場面によって改まって振舞うこともくだけた感じで振舞うこともできること、また、軍隊での上官の部下に対する命令のように、下から上に対する言動だけでなく、上から下に対する言動までもが改まったものになり得ることなどから考えると、上下と改まりが単純な対応関係にあるとは考え難くなる。上下と改まりの関係については、場面の改まりの程度が増すにつれ、その場面における参加者の役割に基づく上下の関係性がより明確なものになる(前景化する)という解釈がより妥当であろう。

一方、親疎については事情がより複雑である。上下の垂直的な軸に比べ、親疎の水平的な距離の軸は、複数の下位の軸から構成される多元的な性格が強いものだからである (cf. Spencer-Oatey, 1996)。たとえば Svennevig (1999) は、水平的な対人関係を、solidarity、familiarity、affect という三つの区別された軸によって概念化し、それらが必ずしも共起するものではないことを指摘している。しかし、これまでの SL の先行研究では、このような多元的な性格が適切に理解

されているとは言えず、親疎の概念そのものが極めて曖昧なままになっていると言わざるを得ない。

また、家族・友人を親、初対面の相手を疎の典型例とする捉え方にも再考の余地があると思われる。親疎は上下と同じく極性の対立概念であり、上下について上でも下でもない関係（同等）が考えられるように、親疎についても親でもなく疎でもない中間領域を考える必要がある。しかし、この捉え方では、その中間領域に対する位置づけが曖昧である。そして、より重要な問題として、家族・友人を親、初対面を疎とみなす親疎の捉え方では、敵意や嫌悪などといった感情に基づく人間関係の一面を見落すことになりかねないことを指摘しなければならない。もし上下と親疎が、人間関係を構成する普遍的な軸であり、全ての人間関係が（決して十分には言えなくとも）その二つの軸で記述できるものであるとするならば（cf. Spencer-Oatey, 1996）、人間の語用実践の全体を見据えた理論では、敵意や嫌悪などといった感情の側面も当然考慮に入れるべきであり、それは水平的な対人関係の軸において扱われるのが妥当だと言えるだろう。

このように、親疎の軸を用いた談話の記述をより妥当なものにするためには、Spencer-Oatey (1996) や Svennevig (1999) が示唆するように、それを感情の次元を含むものとして概念化する必要があると思われる。主体が相手に対して抱く感情は、相互行為の諸局面で動態的に揺れ動くものであり、それを的確に捉えることこそが実際の談話の様相をより忠実に記述することにつながるからである⁹。そして、感情の次元に重きをおいて親疎を捉え直すと、その軸の在り方は従来とは異なるものとなる。すなわち、好意や愛情の対象となる相手は親、敵意や嫌悪の対象となる相手は疎となり、従来疎として記述されてきた初対面の相手などは、親でも疎でもない関係（無）として捉えられるようになるのである。そして、水平的な対人関係は、無から始まり、相互行為を重ねていく中で親または疎に変化していくもの、さらに、親と疎の間を揺れ動くものとして捉えられるようになる。

親疎をこのように捉え直すと、親疎と改まりの関係は、疎と改まり、親とくだけがそれぞれ対応するようなものではなく、改まりの程度が増すにつれて、親疎そのものが無化していくようなものであると考えることができる。また、親疎と言語形式の関係については、親の相手に対して用いられる言語形式と、疎の相手に対して用いられる言語形式の区別が難しいことを考えると（cf. Lakoff, 1979）

¹⁰、言語形式と親疎の間の単純な比例的対応関係は支持し難いものとなる。

このように、言語形式と上下、親疎、改まりの関係は、従来考えられてきたものよりはるかに複雑なものであると言える。これまでの考察を以下の図 4.¹¹にまとめ、それを基に、第 5 節でさらに議論を進めていくこととする（図 4. の「ダ」は裸のダ体、「ダヨ」はネやヨなどの終助詞が付加したダ体を意味する）。

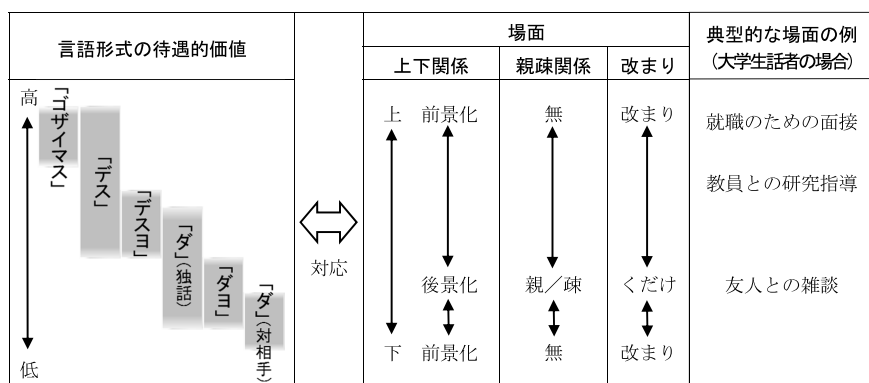


図 4. 言語形式と場面の対応関係

5. 談話の「待遇度」

図 4. では、左側に述語形式範疇別の待遇的価値を、右側にそれに対応する場面の三つの側面（上下、親疎、改まり）および典型的な場面の例を示している。これを基に言語形式と場面の対応関係を、「面接」場面を例にして考えてみたい。大学生の主体の立場から見たとき、就職を希望する企業への面接は、上の相手（面接官）との相互行為の場面であり、上下の側面が強く前景化し、親疎が後景化した人間関係からなる、改まりの程度の高い場面であると言える。そこにおいて用いられる主な述語形式は、高低の軸において同じ高さに位置する「ゴザイマス」と「デス」であり、それらは無標の述語形式として話し手と聞き手の間の明確な上下関係や、場の改まりを指標する待遇的機能を有する。一方、それに比べて低い待遇的価値を有する「デスヨ」や「ダ」などは、その場面では有標の述語形式であり、それらが用いられた場合、場面自体の性格を変化させるものとなる。

このように、図 4. に示した枠組みを利用することで、ある談話（の全体、または、その部分）が高低の軸の上で占める位置を、それに用いられた言語形式を基に判断することができるようになる。本稿ではこれを、談話の「待遇度」と呼ぶこととする。すなわち、談話の「待遇度」とは、言語形式に基づいて判断された、ある談話の人間関係（上下と親疎）と改まりの尺度であると言える。

談話の場面は決して固定的なものではなく、諸局面によって刻々変化するものである。「待遇度」という捉え方は、そのような場面の变化をより忠実に捉えることを可能にする。以下、ごく簡略にはあるが、「待遇度」の観点に基づく談話分析の例を示すこととする。用いるデータは、大学院生（20 代前半の女性：A）と学部生（10 代後半の女性：B）の間で行われた約 20 分間の初対面会話の一部（開始直後：1～3 行目、約 3 分経過後：4～6 行目、約 15 分経過後：7～9 行目）である。ここでは年上の大学院生 A の述語形式に注目してみる。

1	A: <u>こんにちは。</u> <u>はじめまして。</u> よろしくお願ひします。 あ、 <u>す</u> B: こんにちは。 はじめまして、よろしくお願ひします。
2	A: <u>いません。</u> 「研究科名」の方ですか? あ、 <u>そうですよね?</u> B: いえいえいえ、違ひんです。 はい。
3	A: なんかお見かけしたことないんで。 B: え、「研究科名」の方ってだいたい知り合ひなんですか? (中略)
4	A: うん。 <u>そうですよね。</u> B: てっきり女の方だと思ってたら、あ、男だった、しかも結構カッコよかったみたいな。
5	A: そうそうそうそう。分かる <u>分かる?</u> <笑い> B: しかも名前だけ見ると、ちょっと女の人かなって
6	A: そう <u>そうですよね。</u> しかもイケメン <u>ですよね。</u> B: 気もちょっとするし。 ねー。
	(中略)
7	A: それは大学生にとっては大事 <u>だよね。</u> え、みんなこころ辺お昼ごはんどこで B: <u>そうですね。</u>
8	A: <u>食べてんの?</u> 学食さ、明らかにちっちゃいん <u>じゃん。</u> あんま B: うーん。 ちっちゃい…<笑い>
9	A: おいしくないしさ。 <u>本当?</u> B: あ、味はね。 割と、3階は結構おいしいですよ。

1～3 行目において、A はデスマス体基調における定型的なあいさつで会話を始めており、その後用いられている述語形式もすべてデスマス体である。相手に対する敬語の使用（「方」「お見かけ」）は見られるが、「ゴザイマス」などの高い待遇的価値を有する述語形式は見られない。会話開始からまもなく、A は B が年下の学部生であることを知り、しばらくデスマス体基調で会話が続いた後、約 3 分が経過した時点で初めてダ体基調専用の述語形式であるとみなせる「分かる？」

（5 行目）を用いている。しかし A は、そのまま基調文体をダ体へと移行させるのではなく、再び基調文体をデスマス体に戻し（6 行目の「～ですよね」）、その後しばらく、デスマス体と、ダ体基調専用の述語形式が併用される段階が現れる。しかし、会話の後半（7～9 行目）になると、デスマス体の述語形式は一切現れなくなり、A の発話は完全にダ体基調への移行を遂げる。これを「待遇度」の観点から捉えると、以下の図 5. のように示すことができる。

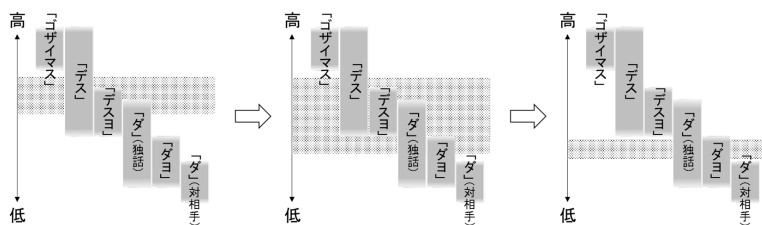


図 5. A の発話に基づいて判断した談話の「待遇度」の変化

Aの視点からみた談話の「待遇度」の変化は、網掛けの幅の変化として表され、それを基に談話における上下、親疎、改まりの側面を考察することができる。まず上下について考えてみると、この初対面会話は、筆者によって実験的に設定されたものであり、何らかの課題解決を目的とするものではなく、会話の内容から見ても、参加者間の力の差が強く前景化するような性格のものだとは言えない。したがって、Aの談話の「待遇度」の低下は、Bに対して及ぼし得るAの実質的な影響力の増大というよりは、年齢という観点からの上下の構図が次第に確立されていったことを意味する（指標する）ものであると解釈できる¹²。この背景にあるのは、年上は年下に対してダ体基調で話すことが許されるという文化的規範の存在であると言えるが、それにより、Aの談話の「待遇度」の低下は、親の側面が前景化した（すなわち、創出的に指標されるようになった）ことを意味するものと捉えることができる¹³。ダ体基調への移行が許されているにもかかわらず、もしAがデスマス体基調を維持していたならば、それは間接的にAがBに対して距離を置いていることを指標するものになり得るからである。また同様に、談話全体の改まりの程度も、会話が進むにつれて次第に低くなっていったと解釈できる。

このように、用いられる言語形式の変化、そして、それに基づいて判断される談話の「待遇度」の変化を追うことで、比較的マクロな視点から、談話の進行に伴う場面の变化を捉えることができるのだが、この枠組みは、よりミクロな観点からの談話の分析にも有効なものになり得ると考えられる。発話の連鎖を参加者両方の視点から分析することによって、談話のどのような局面において、どの程度の有標性を有する言語形式が、誰によって用いられ、それが相手の用いる次の言語形式にどのように影響したか、そしてその結果、談話（の場面）がどのように変化していったかをより忠実に記述することができると考えられるのである。

ただし、上記の分析は、文末の述部のみを対象にしたものであり、実際に何らかの待遇的機能を果たしていたはずの他の様々な言語形式（Aの発話におけるダ体に接続した接続助詞「ん（の）」「し」、あいづちの「うん」「そう」、間投詞「さ」など）までを考慮したものではない。さらに、その枠組みにおける5つの述語形式範疇も、様々な述語形式が有する待遇的価値の違いを十分に反映したものとは言えない。従来のSLの研究では、SLの分類が細かくなることによって発話のコーディングと談話の分析が難しくなることが指摘されており（三牧1996、宮武2009）、比較的単純なSLの分類が分析に用いられる傾向にあった。そしてその結果、性質を異にする言語形式が同じレベルに分類され、その違いが捨象されることになってしまっている。しかし、本稿で示した枠組みでは、たとえば、図4の「ダ」がその機能によって二つの異なる幅を有するものとして区別されているように、それぞれの言語形式が有する待遇的価値の違いをある程度まで反映できるものとなっている。たとえば、確認要求のデショウのように、他とは明らか

に異なる待遇的価値を有する言語形式については、別途の項を設け、他の言語形式と並んでその待遇的価値を示すことができるだろう。すなわち、この枠組みは、文末の述語形式に限らず、諸々の言語形式を、その待遇的価値の違いをできる限り捨象せずに総合的に考慮することを可能にするのである。

6. おわりに

以上、本稿では、SL という捉え方が有する限界を指摘し、言語形式に基づく談話の分析をより妥当なものにするために、言語形式の待遇的価値を幅として捉える観点を示し、それに基づく新たな分析の枠組みを提案した。そして、その枠組みを用いることによって、談話の動態的な様相をよりの確に捉えることができること、また、様々な言語形式を、それぞれの有する待遇的価値の違いをできる限り反映させた形で総合的に検討できることを論じた。ただし、この枠組みに基づく談話の分析をより妥当なものにするためには、様々な場面の談話における言語形式の使用実態を把握し、それを基に言語形式の待遇的価値を判断していく必要があると言える。また、この枠組みは、上下、親疎、改まりという三つの側面に限定されたものであり、言語形式が実際の談話において担い得る様々な指標の意味を十分に考慮できるものではない点も忘れてはならないだろう。そして、そもそも上下、親疎、改まりといった場面の側面が、常に言語形式にそのまま反映されるわけではないこと、また、言語形式だけがそれらを指標するわけではないことを考えると、言語形式のみに基づく談話の分析は本質的に限界を有すると言わざるを得ない。今後は、分析枠組みの精緻化を図ると共に、言語形式だけに頼らない多角的な視点からの談話分析の方法を考えることが課題となるだろう。

【注】

- 1) 述語形式の例における破線は、一部の先行研究においてその間の区別がなされていないものの、待遇的価値の差についての明確な言及はなされていないことを意味する。なお、図 1. には「行く？」が含まれていないが、それは、ダ体の SL を細分化したとき、それがどのレベルに属するかが先行研究では明確に示されていないためである。
- 2) 先行研究における SL の分類や談話分析の方法、およびその限界と問題点については、李（2016）を参照されたい。
- 3) 「ゴザイマス」と「デスヨ」を、互いに重ならない幅を有するものとして示しているのは、それらの述語形式が一つの談話における一人の話者によって用いられる可能性を排除するものではない。図 5. で示すように、談話の「待遇度」を幅として捉えることにより、「ゴザイマス」と「デスヨ」が併用される談話を捉えることができる。
- 4) 従来の SL に対しても同様に言えることだが、そもそも待遇的価値という観点から言語形式を一元的に捉えることは、様々な場面（そして、場面における諸側面）を一元的に捉えることを意味する。言語形式を一元的に捉えることは、それが語用において

- 担う一つひとつの指標的意味を一元的に抽象化することにほかならず、その指標的意味とは、言語形式によって指標される様々な場面そのものの性質だからである。
- 5) しかし、例えば、第三者に対する敬語の使用が、間接的な形で聞き手に対する待遇の機能を果たすことができるように (cf. 滝浦, 2005; 성기철, 2007 など)、それらの指標的機能を厳密に区別することはできない。
 - 6) 独話としての裸のダ体は、言語形式それ自体が相手の存在を想定しない (言語構造の次元において待遇的に中和化された) ものであるがゆえに、ダ体基調からデスマス体基調の会話にわたって広く用いられ得る (比較的に広い幅の待遇的価値を有する) と考えられる (cf. 三牧, 2000)。
 - 7) 同様に、韓国語の SL に関しても、SL の両極化と格式性の増加という対応関係が認められることが指摘されている (성기철, 2007)。
 - 8) たとえば、アフリカの諸言語における文法的敬語について検討した Irvine (1992) は、敬語に見られる感情の排除、慣習性など (つまり、場面の改まりにつながる側面) が、他者を高める手段になっていることを指摘している。
 - 9) ただし、感情は、言語形式だけでなく、声や表情、相手との物理的な距離などの様々な記号 (の共起) によって創出的に指標され、前景化するものであり、また、その表出は意図的に制御され得るものでもある (cf. Arndt & Janney, 1991)。したがって、言語形式だけをもって話し手の感情を直接論じることではできない。談話分析において重要になるのは、何らかの感情を指標すると考えられる様々な記号が、話し手のどのような意識・意図に基づくものであるか、そしてそれらが聞き手にどのように受け取られ、さらにそれがその後の談話の展開にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることだと言えるだろう。そのためには、第三者の視点だけでなく、談話に参加する当事者の視点から談話を記述する質的なアプローチが不可欠であると言える。
 - 10) たとえば、低い待遇的価値を有すると考えられる言語形式 (ダ体の命令形や、より端的な例としては、卑罵語など) は、敵意や嫌悪感を抱く相手に対してだけでなく、近い関係にある友人などに対しても用いられ得るものであり、親と疎どちらをも指標し得る言語形式であると言える。
 - 11) 図 4. に示した各述語形式範疇の待遇的価値の幅、およびそれに対応する親疎、上下、改まりの程度は決して絶対的なものではないことを断っておく。
 - 12) ただし、上下は相対的なものであり、片方の参加者の言語形式だけでは決して判断できないものである。A の談話の「待遇度」の低下が上下の差を指標するものになり得たのは、B の談話の「待遇度」が低下しなかった (デスマス体基調が維持されていた) こと、つまり、A と B が用いる述語形式の間に非対称性が生じたことによるものである。
 - 13) Svennevig (1999) の議論に基づいてより詳しく述べるなら、会話の内容などから考える限り、ここに関わっていた水平的距離の側面は、solidarity ではなく、familiarity、そして、特に affect であったと言える (これは事後インタビューでの A の発言からも部分的に確認されている)。

【参考文献】

- 李址遠 (2016) 「スピーチレベル研究に対する批判的再検討」『待遇コミュニケーション研究』13, 1-16.
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 27-42.
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』大修館書店
- 黒沢晶子 (2010) 「「名大会話コーパス」に現れた文末形式—普通体と丁寧体に違いはあるのか—」『山形大学留学生教育と研究』2, 3-11.
- 小山亘 (2008) 『記号の系譜—社会記号論系言語人類学の射程—』三元社
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店
- 中北美千子 (2000) 「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107, 26-35.
- 三牧陽子 (1996) 「待遇レベル・シフト」『言語探求の領域 小泉保先生古希記念論集』大学書林, 437-445.
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『多文化社会と留学生交流』4, 37-53.
- 宮武かおり (2009) 「日本語会話のスピーチレベルを扱う研究の概観」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』1, 305-322.
- 森山卓郎 (2013) 「丁寧語について」『国語と国文学』7, 3-18.
- Arndt, H and Janney, W.R. (1991). Verbal, Prosodic, and Kinesic Emotive Contrasts in Speech. *Journal of Pragmatics* 15(6), 521-49.
- Irvine, J.T. (1992). Ideologies of Honorific Language. *Pragmatics* 2, 251-262.
- Lakoff, R.T. (1979). Stylistic Strategies within a Grammar of Style. *Annals of the New York Academy of Sciences* 327(1), 53-78.
- Silverstein, M. (1976). Shifter, linguistic categories, and cultural description. *Meaning in Anthropology*, K.H. Basso and H.A. Selby (eds.), Albuquerque: University of New Mexico Press, 112-171.
- Spencer-Oatey, H. (1996). Reconsidering Power and Distance. *Journal of Pragmatics* 26(1), 1-24.
- Svennevig, J. (1999). *Getting Acquainted in Conversation: A Study of Initial Interactions*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 김민수 (1964) 『신국어』학일조각
- 성기철 (2007) 『한국어 대우법과 한국어 교육』글누리